

## (6) 平成10年度で終了した計画研究

### ニホンザルの採食生態と社会関係に関する比較研究

(実施年度：平成8～10年度)

(推進者：山極壽一・杉山幸丸・森 明雄・  
大澤秀行・松村秀一)

本研究は、ニホンザルの生息環境の定量的把握を行った上で採食生態と集団間、集団内の社会関係を調査し、環境条件によって行動特性や社会関係がどう変化するかを明らかにすることを目的とした。多様な環境での比較を行いたかったが、実施された研究が高崎山と屋久島に集中したため、餌付け条件下と自然条件下の季節と標高による違いを分析した。

まず高崎山ではサルの生息数の増加にともない食物となる資源が劣化している状況が量的に調べられた。その結果、食物の劣化は植物の枯死だけでなく、開葉、開花、結実の時期の遅れや林床植生の増加、土壌の硬化など多岐にわたって発現していることが明らかになった。その上でメスたちは優劣順位に対応して自然の食物と人工の食物の摂取割合を変化させており、食物をめぐる競合がメスの繁殖に重要な影響を与えていることが判明した。しかし、メスは出産すると高順位でも低順位でも餌場で人工餌を優先的に摂取でき、オスが新生児をもつメスを許容するため、優劣の差が軽減されることも示唆されている。

屋久島では初めて標高の高い地域のニホンザルが調査され、食物の豊富な海岸域に比べて群密度は低い、食物資源の密度に対応するほど低くないことが判明した。これは豊富な林床植生と季節移動によるものであることが示唆されている。海岸域では人付けされている3群を対象にしてニホンザルの採食戦略と交尾戦略が調査された。食環境の季節変化と生殖生理の変化にメスがどう対応しているかという点を解明しようとしたもので、まずメスが交尾期にオスとの近接関係を変えることによって採食効率を上げていることが明らかになった。メスとの交尾は最優位のオスが独占する傾向があるが、DNAを用いた父子判定では半分近くあった。この分析は現在も進行中であるが、メスが繁殖相手となるオスを選別していることが示唆されている。これらの研究によって

食物をめぐる同性、異性間の競合を左右する生態的、社会的条件をいくつか特定し、平成11年3月に開催した研究会でその進化史的意義について討論できたのは本課題研究の大きな収穫であったと考えている。

(平成8年度)

・ヤクシマザルメスにおける性行動と採食行動の関連

(松原 幹、京都大・霊長研)

・高崎山のニホンザルの食糧資源からみた森林構造とその分布

(長岡寿和、大分短大)

・屋久島の上部に生息するヤクザルの分布と糞分析による食性の研究

(大竹 勝、日本モンキーセンター、  
好広眞一、龍谷大・経営)

・高崎山のニホンザルの繁殖個体の採食戦略とその縦断的比較

(横田直人、大分短大)

(平成9年度)

・ニホンザル野生群メスの繁殖戦略に関する研究

(早川祥子、京都大・霊長研)

・ヤクシマザルオスにおける性行動と採食行動の関連

(松原 幹、京都大・霊長研)

・高崎山のニホンザルの食糧資源としての森林の構造と季節変化

(長岡寿和、大分短大)

・屋久島の上部に生息するヤクザルの分布と糞分析による食性の研究

(大竹 勝、日本モンキーセンター、  
好広眞一、龍谷大・経営)

(平成10年度)

・野生ニホンザルオスにおける採食行動の年齢差

(半谷吾郎、京都大・理)

・野生ヤクシマザルにおける繁殖戦略と採食戦略の相互関連

(松原 幹、京都大・霊長研)

・高崎山のニホンザルの繁殖個体の採食戦略とその縦断的比較

(横田直人、大分短大)